

八十木裕幸教授を悼む

石原孝哉

(英語)

長靴、どこまでも続く深い雪、遠くで響く汽車の汽笛、どういうわけか、私のなかの八十木先生のイメージは冬の北海道とダブってしまう。

昭和43年の3月、まだ深い雪の残る岩見沢駅に降り立った私は、その寂寥たる景色に圧倒されて、また汽車に乗って東京に舞い戻りたくなかった。

上野から、気が遠くなるほど長時間汽車に押し込められた挙句、吹雪舞う津軽海峡を青函連絡船に揺られて函館に渡っただけでももう外国に来たような気分になったものだ。寝台車を使えばゆっくりと身体を伸ばせるし、連絡船にも体の伸ばせる和風の部屋があることを知ったのは、何回も往復して、長旅を楽しむようになってからのことで、初めての旅では何もかもが手探りであった。この間ずっと椅子に座っていたのだから、「エコノミークラス症候群」とやらで血行障害を起こさなかったのが不思議である。

原野と白い雪ばかりの平原にもう我慢も限界だと思われた頃、童話の本で見たような赤い屋根、煙を吐き出す煙突のある白い家が並ぶ大きな街に着いた。札幌だった。車窓から見る札幌は近代的で、美しく、絵でしか見たことのない北欧のようであった。

ここで列車を乗り継いで、岩見沢に向かったのだが、景色はだんだん暗くなり、線路脇の雪もどんどん深くなって、気分は落ち込むばかりである。その挙句が、煤煙でくすんで、雪までが黒びかりのする岩見沢の街に降り立ったのだから、落胆も分ろうというものだ。

やっと気を取り直し、北海道教養部で着任の手続きを済ませると、そこでまってくれていたのが八十木先生であった。豊かな黒髪、手袋、長靴、それにこやかな人懐っこい笑顔。

学内を案内してくれた後、「ああ、先生の下宿、決めておいたから。学生が

多くなると、空き部屋、すぐになくなるから、、、」と屈託なく笑って、そこま
で案内してくれた。今にして思えば15分ほどの道のりだったが、革靴でつるつ
る滑りながら歩く雪道はとてつもなく長かった。先生の紹介で入ったこの下宿
は快適で、結婚するまでここにいた。

長靴、どこまでも続く深い雪、遠くで響く汽車の汽笛は、このとき八十木先
生と歩いた道である。

八十木先生が研鑽を積んで北海道教養部に移籍された後は、組合活動などで
よく上京することもあり、時々ご一緒することがあった。その頃にはすでに、
髪の毛は雪のように白くなっていた。その後北海道教養部が廃止されて、先生
を外国語部にお迎えしたときは、ちょうど外国語部が解散するかどうかで、お
おもめにもめている最中であった。先生もびっくりされたことであろう。

八十木先生が入院されたとの知らせを受けたのは、在外研究でイギリスに
行っている時であった。帰国してからお見舞いに行くと、声こそかすれていた
が元気で、早く学生の前で講義したいと意欲を示されていた。

誰からも愛され、好かれ、先生のことを悪く言うひとは誰もいなかった。
「憎まれっ子世にはばかる」の言葉どおり、私は残り、先生は逝かれてしまっ
た。「折があったら、何か一緒に研究でもやりたいね」といいながら、ついにそ
の機会を失ってしまったのが残念である。